



趙勇氏(中央)インタビュー中の小城地区日中理事  
犬山 俊郎氏(右)と多久日中理事中尾彩節子さん(左)

#### 4. 文工団から吉林省歌舞団へ

——毛沢東が亡くなった後、世の中は大きく変わって行ったでしょう。

そうですね。1976年9月に毛沢東が死去し、華国鋒が主席となり、毛沢東の文化大革命は終結しました。77年には知識青年の下放もすぐ中止となり、大学ももと通り入学試験を実施し始めました。

このころ、私は九台県の文工団（文化工作団）に入って演奏活動をしながら、世の中の激しい動きを見ていました。人々の暮らしはやはり貧しくて、配給制度はまだ続いていました。76年には父が体調を崩し、後に腸ガンだとわかりました。すぐ手術をして家で養生をすることになりました。私は文工団をやめて父の看護にあたろうと思い、文工団に申し入れましたが、やめさせてはもらえませんでした。

このようなとき、吉林省歌舞団が演奏者を募集していることを知りました。私は再度文工団に、父の面倒をみるという理由で休みを申請して、許可されました。休みをとった私はすぐ吉林省歌舞団の募集に応じて、すぐ試験を受けに行きました。受験者は多かったですけれども、6人の合格者のひとりに入り、合格することができました。そこで、長春市にもどり、しばらくは試用期間として歌舞団で演奏活動に参加していました。

——趙勇さんの実力もあったからでしょうが、大変うまくいきましたね。

ところが、ここから難問が発生しました。私の身分はまだ九台県の文工団にあるのです。その私が歌舞団で演奏活動をしているのです。そのことが文工団にも知れてしまい、文工団の方から歌舞団の方に私を戻すようにとの要請があったのです。歌舞団の方は、いまや重要な人材であるので渡せないというのです。ここで双方の交渉が始まったのです。いろいろなかけ引きがあった後、歌舞団の方が押し切ったのです。この間、私は個人的にはなにも動いていません。これには双方の力関係からもはっきりしていたのです。歌舞団は「省」級であり、文工団は「県」級（日本では「町」にあたる）だから、「省」が「県」を抑え込んだのでしょう。この結果、私は長春市にもどり「吉林省歌舞団」の一員となれたのでした。

#### 5. 瀋陽音楽学院入学

——1978年やっと吉林省歌舞団で演奏活動を始めたのに、この後すぐ大学にはいるのですね。

ここでしばらく活動していましたが、人間の思いには終わりはなく、もっと先へ進みたいという思いが、大学進学を考えさせたのです。

やっと私を引き受けてくれた楽団ですから、楽団に相談しました。楽団は、大学を卒業したら再びこの楽団に戻るという条件で、受験を許可してくれました。そこで瀋陽音楽学院（4年制大学）を受験したのです。

6月に試験を受けました。いろいろな楽器ごとに合格が決まるのです。楊琴は4人が合格でしたが、私はその4番目で合格したのです。(しかし、その後半年の頑張りで1番になりました。それを卒業まで通しました。)9月に入学しました。中国は9月が新学期です。

—— **81年の卒業までの4年間、音楽の勉強をみっちりやったのですね。**

そうですね。音楽の科目を幅広く勉強しました。特に作曲や編曲など、その後の私の活動に大変役立ちました。もちろん楊琴の練習には力を入れました。学内で私の練習時間の長いことは、大変評判になっていました。苦しかったけれども、一番力を入れました。

卒業する時は卒業試験がありますが、私の場合は私だけの楊琴ソロコンサートを開くようにと、教授から言われました。このコンサートに全教授が参加するということでした。個人の楊琴ソロコンサートを開くのは、瀋陽音楽学院開学以来のことだと、大変注目されました。コンサートは大成功で、最後には学長から、大学の歴史に残るコンサートであったと、大変にほめられました。

—— **そのほか、大学での生活はどんなでしたか。**

大学ではみんな寮に入ります。学費は、個人で出す必要はありません。すべて国費で賄われます。ただ、食費や自分で買う参考書代(教科書代は不要)やその他生活費は必要です。当時私は、母から10元と省(吉林省歌舞団に在籍しているため)から10元を毎月貰っていました。これですべてを賄わなければなりません。学校の食堂では最初に食券を買っておくのですが、1ヶ月だいたい18元ぐらい必要です。それを節約して参考書などを買うのにあてていました。ときには、高粱だけの飯に醤油をかけて食べることもありました。食事の工夫が一番たいへんでした。

大学構内の映画館では、だんだん外国の映画なども上映されるようになり、日本の「おしん」も大変人気がありました。しかし、私はチケットの2角が買えなかった。見かねて楊琴の先生がチケットを買ってくれたこともありました。

—— **友達などはどうでしたか。**

そうそう、今になってはもう話してもいいでしょう。学校ですから試験もありますね。ある学期試験のときのことで。和音を聴き取るテスト、聴音のテストです。私は得意としていたのですが、不得手の友達5、6人がそっと教えてくれというので、私はそっと答えを教えてやりました。するとそれが見つかり、監督の先生から君は不合格にすると宣告されてしまいました。

—— **カンニングがばれたわけですね。それは大変なことになりました。どうしましたか。**

友達は心配するなというのです。友達は後でお土産を持って、先生のところに交渉に行って、なんとか闇にほうむってくれたのです。私は行っていません。友達からは大変感謝されました。

こんなこともあって、休日などには友達が肉を食べに連れて行ってくれることもたびたびありました。貧しい食事の時代に、大変助かりました。多くの友達も、音楽のことでは私を信頼し、頼りにしていたようです。

## 6. 父の死(医療ミス)

—— **お父さんは、趙勇さんが大学に入ってすぐに亡くなられたそうですが、どのような経過だったのですか。**

そうですね。私の大学合格は父に知らせることができましたが、残念ですがその後すぐ父は亡くなりました。話せば長くなりますが…、実は父の死は医療ミスによって早まったのでした。

1回目の手術は盲腸炎という診断で、鉄道病院で受けました。母もこの看護婦長をしていましたので、盲腸炎の手術なら簡単にすむだろうと思っていたのです。ところがその後父の腹痛は治

まりませんでした。後で母は、手術に立ち会った同僚の看護婦から「父の盲腸は炎症を起こしてはなかったが、切除された。しかし、すぐ傍の腸のところにアンズの実ほどの腫瘍のようなものがある、それはそのままにして、元に戻された。」ということを知ったのです。

初めの手術から1年ほどして、今度は吉林省医科大学で診断を受けると腸ガンだとわかり、すぐ手術を受けました。この手術には鉄道病院の医師や看護婦も研修見学として立ち会ったそうです。もちろん母は入れません。後で、立ち会った人の話では、1年前はアンズの実ほどだったものがアヒルの卵ほどの大きさになっていたそうです。

父のガンは転移しやすいものではなかったそうですが、大きくなりすぎて腹壁の内側に密着していて、皮膚までもガン細胞に侵されていたのです。1年前に見つけていて、ほったらかしてこんなに悪化させてしまったのです。

母は父の死後しばらくして、父の1回目、2回目の手術の経緯を知り、どうにも納得できなかったもので、これは明らかに医療ミスではないかということで裁判に訴えました。医療裁判は大変難しいのですが、最終的には医療ミスがあったと認められました。

その結果、国はその保障の義務が生じます。私の家族は、母と私は自立していますが、妹2人がいます。上の妹は父の会社に自動的に就職させることになり、下の妹はまだ中学生だったので、大学を出て就職をするまでの生活費を国が保障することになりました。

## 7. 吉林省歌舞団にもどる

—— 81年に大学を卒業すると、再び吉林省歌舞団に戻ったのですね。

そうです。実は、大学に残って教師になってほしいという要請もありました。しかし、歌舞団との約束もありましたので断りました。私には演奏活動のほうが楽しかったし、もう一つは、歌舞団には王艶さん（現夫人、後出）もいたのです。

—— 歌舞団に戻ってよいよ演奏活動に取り組むのですね。またこのころになると文革も終わり数年経ちますから、世の中もだいぶ変わってきたのではないですか。

まず、私の在籍する吉林省歌舞団は、私が大学に入った時に、「吉林省歌舞劇院」と名称が変わり、とても大きな楽団になりました。

私の記憶にある当時の「吉林省歌舞劇院」の概要は、以下のような構成だったと思います。

4つの楽団で構成されていた。

○交響管弦楽団（洋楽のオーケストラ） 演奏者、スタッフ 100人超

○歌劇団 60人前後 ○舞踊団 60人前後

○民族楽団（私の所属） 80人超

（民族楽団の構成）

・楊琴 3人（私を含め） ・琵琶 7人 ・チェロ 4人 ・ベース 3人

・横笛 4人 ・箏 4人 ・ラッパ 4人 ・打楽器 5～6人

・笙 4人 ・二胡 30人ほど ・指揮者 2人

この民族楽団は、中国4大民族楽団の一つに数えられていた。

私は、楊琴演奏のほかに、編曲も手がけていた。後々には指揮も望まれていた。

私が大学を卒業するころまでは、まだ配給制は残っていて配給券が30数種（衣料券なども）あったと思います。一方、自由市場なども現れて、少し高いけれども券がなくても買えるところも出てきました。82年～83年ごろにこの券は徐々になくなったように思います。

あの四人組が逮捕された後、音楽も開放されて以前の美しい音楽などもラジオから流れるようになってきました。鄧小平の改革開放の時代が始まり、特に開放の方が身近に感じられるようになりました。外国の様子などもラジオやテレビで知ることができるようになりました。当時、12型白黒テレビが普及していました。

私が楽団に戻ってすぐ、外国との友好交流が始まり、私も国の代表団の一人としてまずは北朝鮮へ行きました。吉林省のすぐ隣ですから。北朝鮮には2回行きました。それからカナダにも行きました。そのときは日本経由で。カナダの北の方の都市と吉林省が姉妹都市提携をするための友好訪問団として行きました。このときは、ほとんどが団体行動で、自由な行動は制限されていたのですが、目にするものすべてが驚きでした。今まで、中国が一番幸せな国だと教育されてきていたけど、都市の姿にも文化の発達の違いを強く感じ取りました。大変な驚きでした。外国はすばらしいという思いと、外国へ行きたいなあという気持ちもわいてきました。

年代が更に進み、86・87年ころになると改革もどんどん進んで行きました。以前は給料もほとんど上がらなかったけれども、このころになると年齢によるのではなく、能力（技術）ある者にはそれなりの給料が支給されるようになった。私は常に、同年代の人たちより一ランク上の給料をもらっていました。

## 8. 中国民族楽器演奏会で優秀賞を得る

——楊琴奏者としての趙勇さんをいちやく有名にしたコンクールとはどんなものでしたか。

これは82年8月に開催された「中国民族楽器演奏会」という民族楽器演奏のコンクールです。四人組逮捕後初めての全国コンクールでした。吉林省からは私を含めて4人が選ばれ、各省からも選ばれた民族楽器演奏家が多数集まりました。私は楊琴ですが、さまざまな民族楽器奏者が集まり、山東省済南市で三日間昼夜を通して行われました。

——そのとき趙勇さんが演奏した曲が「満族舞曲」だったのですね。

そうです。演奏する曲は自由です。多くの出場者は、古来の名曲を選んで演奏していました。私は自分で作曲をした「満族舞曲」を演奏したのです。自作の曲を演奏したこともよかったのかもしれませんが、優秀賞を受賞しました。100元の賞金ももらいました。

——すばらしい。100元の賞金も当時にしては破格ではないですか。

そう、大変うれしかった。更にはこのとき泰山にも登り、曲阜にも行かせてもらいました。

初めて泰山に登りました。当時はもちろんロープウェイもありません。朝早く出発して夕日の沈むころに到着です。180の石段が18ヶ所あるのです。もちろん石段ばかりではありません。とても疲れます。しかし、景色が次々に変わりすばらしかった。登り切ったときには、感動で涙が出るほどでした。このとき、曲阜にも行き、孔廟や孔林、孔府なども見ることができました。孔林の石碑が壊され、倒されたままになっていて、文化大革命の孔子批判で、紅衛兵によって壊されたものが、まだそのままになっていたのです。

——このコンクールは趙勇さんにとって実り多いものだったですね。

もう一つ、これによって「中国音楽家協会会員」に推挙されました。

(2013. 7. 30)